



㊦銀色の大きめの魚はほぼすべてカタボシイワシ。定置網で大量に漁獲される㊦水槽内に泳ぐカタボシイワシ

カタボシイワシ

学名 *Sardinella aurita*

- 分類 ニシン目ニシン科サッパ属
- 大きさ 体長20センチほど
- 分布 インド・西太平洋（アフリカ東岸～日本、オーストラリア）、大西洋の西部（メキシコ湾～ウルグアイ）と東部（地中海～アフリカ西岸）の暖かい海。日本国内では若狭湾（京都府）と相模湾（神奈川県）から九州南部・種子島
- 食べ物 動物プランクトンなど

特徴 体は銀白色で、背側は青色や緑色がかかる。まるで肩に星があるように、えらぶた（えらを外側から覆う板状の組織）の上部に黒色斑がある。ニシン目魚類内で最も広い分布域をもつ

九州南部で大量に取れる

近年、鹿児島で急増する魚がいます。カタボシイワシです。従来日本国内ではほとんど記録のない珍しい種でした。21世紀に入ってから分布域を広げているようで、かつて鹿児島近海ではマイ

ワシが大量に取れていました。その量が減った時期と同時に、カタボシイワシが増加しています。分布拡大の理由は解明されていませんが、マイワシと置き換わった可能性も考えられています。鹿児島湾では、冬になると大群をなして港に集まります。それを捕食するために、ブリなどの大型魚やカツオドリもやってきます。カタボシイワシを狙って、カツオドリが空から水中へと一気にダイブする光景は、今や鹿児島湾の冬の風物詩とも言えます。湾内でくらすイルカたちにとっても食べやすいように、ハセイルカが捕食している様子が観察されています。

おもしろ生き物図鑑

かごしま水族館から

味は悪くないものの、身に脂ののらず小骨が多いため、ほとんど食用にはされません。大量に取れますが、養殖魚の餌にするか捨てられています。有効活用のため、かごしま水族館では、ハンドウイルカの餌にできないか取り組んでいます。

この先、カタボシイワシの分布域や個体数がどのように変わり、どう利用されていくのか、注目しています。（展示課海獣展示係・中村潤平）